

果試ニュース

第11号 平成11年8月



新品種 愛媛10号

昨年、果樹試験場は創立50周年を迎え、半世紀にわたる足跡や業績を記念誌に纏め発行した。業績は極めて広範にわたっているが、これらの中でも、昭和39年から46年に越智郡菊間町で実施した「実験農場」が際立っている。この事業は、傾斜地柑橘園の造成方法として幅2mの園内作業道を設置し、スピードスプレーヤーや大型風筒式防除機で効率的に防除を行い、収穫・運搬は収穫台とトラックで行なう方式で、当時は全国的に注目されたが、急傾斜地の多い本県ではこの方式を導入できる地域は少なかった。それから30年を経過したが、当果試では現場に合った省力栽培技術体系確立のための諸々の試験を実施し、四国農試等で果樹園用小型機械が開発されたこともあって、やっと県内外の柑橘園で省力化への取り組みが盛んになり、その模範的な事例が時々新聞で紹介されるようになった。

国際化の時代を迎え、生産コストの削減により、消費者に値頃感で果実を供給することが必須になり、また一方で、農業就業者数の減少と経営者の高齢化の時代を迎えて、省力化、軽労働化への取り組みがますます重要になってくることは確実である。また、先般の埼玉県所沢市で起きた野菜のダイオキシン問題のように、環境問題もますます大きくなってこよう。こうした時代の流れの中で、当果試はニーズに合った試験研究を積極的に実施してゆくことにしており、皆様の全面的なご支援をお願いします。

場長 別府英治